G.GABRIELI の編曲について

辻　井　英　世

Giovanni Gabrieli (1557～1612) は，いうまでもなく，16世紀イタリア音楽の最隆盛期を飾った一方のグループ，いわゆる「ヴェネツィア楽派」を代表する巨匠の1人である。サン・マルコ大聖堂の内部構造とそれを利用，あるいは，それに適合して作られた数々の音楽は Poly-Choral (多合唱)，あるいは Cori Spezzati (分割合唱，空間的合唱) などという術語とそれへの説明でもって，西洋音楽史をひととおり経たことのあるものにとっては，なにはともあれ，印象的なものである。

とはいえ，Gabrieli を代表とするそのころの作曲家の Cori Spezzati の音楽を実際に耳にすることはたいへん困難である。その理由の第一は，演奏の空間そのものがサン・マルコ寺院にしかない，といってよいそのまれな特殊性にあろう。これはなんとも仕方のないことであり，また，現在，サン・マルコ自体も，建物そのものはのこってはいるものの，往時の演奏を再現するにはすこし老朽化がすぎて，とうてい常時の使用には耐えられない状態になっていることから，かりに私たちがヴェネツィアに在住したところで，すぐさま，Cori Spezzatti が楽しめるというわけではない。結局は適当な会堂，ホールなどで適当に演奏することで，サン・マルコの空間におけるひびきを連想するより方法はないわけなのである。しかし，近年，たとえば，ドイツの Stockhausen が，Cori Spezzatti をひきあいにだして，Raummusik (空間音楽) を提唱したりしていることなどから，いずれは，こうした種類の様式の音楽を演奏するための会場がどこかに建設されることも期待されないわけではない。(Expo '70 では，この種の試みがさまざまなされることであろう)

この小論は，しかし，以上のべた演奏空間について云々することをその意図とするものではなく，困難性のもうひとつの理由，つまり，当時の演奏形態＝楽器編成につよく関係するものである。

ここには問題が2つある。

ひとつは，最近の研究の結果，Gabrieli (をはじめとする「ヴェネツィア楽派」の作曲家たち) 当時の楽器編成と楽器のそれぞれについて多くのことがずいぶん明らかにされてはきたが，それでもまだまだ推定の域を出ていない場合が多いということ。

つぎにかりに当時のそのままの演奏形態が完全に再現されたとしたところで，はたして，現代の耳がそれをよろこんで受けいれるものかどうかということ。

以上である。

2つのうちの前者については，その研究活動の成果につよい興味と期待がもたれるものであ

るが，だからといって，後者についても，ただちに肯定的であり得るわけではない。

というのは，古い時代の楽器での演奏からは，なるほど，素朴な奥床しさが感じられようとはいうものの，その利点より以上に，一種形容しがたいたよりなさと不快感が，私1個人の場合だけのことかもしれないにせよ，認められるからである。

もっとも，そうはいっても，このところ市販されている Gabrieli のレコードのいくつかはその Instrumentation がやや単純にすぎて，ただ金管楽器を合唱のパートに重ねるだけであるうえ，演奏もいくぶん濶達にすぎるという場合がしばしば気にならないではない。それゆえ，明快，壮麗な Gabrieli の特色がおどろくばかり鮮明に表現されているわけだが，しかし，ともすれば，その点のみ強調されすぎるということも起り得るのである。

以上のような見地から，Giovanni Gabrieli をいずれの方向にもすぎることなく，しかも，現代の耳に抵抗感なく訴えることができるようにと考えて作製したものがこの編曲である。

ここにとりあげた Motet ≪Domine Exaudi Orationem Meam≫ は各5声部の二重合唱という声部の豊富さに加えて，楽曲の規模が比較的小さいものであることを利点として選択決定されたものである。

曲は1597年刊の Sacrae Symphoniae にふくまれるもの，編曲の直接素材は，アメリカの高名な Gabrieli 研究者，Denis Arnold の編集による

Corpus Mensurabilis Musica 12

Giovanni Gabrieli

Opera omnia

の Volume Ⅱ (1959) にあるそのままのものである。

なお，これについて当の Arnold は，

"The whole of the present transcription has been made from a micro-film copy of the original print supplied by the Biblioteca Ariostea of Ferrara" とのべている。

次に全曲で4ページ半の原楽譜のうち，最初の2ページ（編曲総譜の最初の4ページ）を参考のため掲げておく。これは編曲総譜に 3 stable ずつに分けて書かれているとおり，音と音価についてはなんらの変更も加えられていない。5 stable を 3 stable に要約しただけである。

つまり，編曲といっても，この場合，器楽部分の付加編曲であって，合唱パートのいずれかを取りのぞいて，器楽でそれにあてるということはまったく行なわれていない。

編曲プランとその realization については，総譜を見ていただければ一目瞭然のことであるが，蛇足ながらかんたんに触れておく。

1. 可能なかぎり，合唱原譜にある音をのみ重ねることにして，それ以外の音の付加・追加は極力さけるようにつとめた。

2. 使用楽器は，その演奏能力が現代的にあまりにも洗練されすぎたもの，つまり，Violin をはじめとする弦楽器，それに管楽器では Flauto(flute)，はさし控えることにした。(弦楽器の，現代では通常の，細やかな vibrato,flute のつきぬけるように澄みきった音色などは Gabrieli の音楽には不向きのように感じられる)

3. 古い時代の楽器では，このところようやく耳なれてきた Flauto Dolce(Recorder, Blockflöte) と，Oboe の古い型である Oboe di Barocco を，そのかわり，採用することにした。

4. 合奏の主体を占める金管楽器については

(1) Tromba (trumpet) は，brillante であることはもちろん dolce さも十分保持している通常の「変ロ管」をとることにした。(最近，各管弦楽団は1全音高い「ハ管」の Tromba を使用する傾向にあるが，高音の吹奏が容易であるものの，これは音色がいくぶん鋭い)

(2) Cornetto in Si^b はさきの Trombe Si^b よりさらに dolce である。

(3) Corno (horn) と Trombone は通常のものである。

(4) Trombone にほとんど等しい中・低音楽器として，Eufonium (euphonium) を採用した。この楽器は案外知られていないが，金管群のなかでは Violoncello に近いような美しい音色が得られる。そのほか，Trombone ではときにより困難な Legato 奏法がせまい2度，3度などの場合，ことにすぐれている。

(5) Tuba は計3本を必要とするが，すべて実音で書かれている。第2合奏の2本はできることなら，大きさの異なるものがのぞましい。(たとえば，in Mi^b と in Si^b というように)

5. 木管楽器で他に用いられているのは，通常の Oboe と Fagotto，それに Clarinetto と Clarinetto Basso の4種である。これらのうち，主に Oboe と Fagotto が表面に聴えるようにされており，Clarinetto は，この編曲では，1種の埋草であって，Solo 性は与えられていない。Clarinetto Basso も木管部分低音の補強である。

6. Coro Ⅰ (第1合唱) 側は音域も高いことであるから，3本の Trombe，2本ずつの Corno, Trombone，それに Tuba 1本という簡潔で均斉のとれた金管合奏と，Flauto dolce を高音楽器とする木管合奏を重合させることにした。その点，Coro Ⅱ 側は音域が低いゆえ，Eufonium 2，Tuba 2 と，それに比例して，低音位での重厚さと，いくぶんなりともの豊かさが音色性のうえに求められてある。金管高音楽器に Cornetto をあてたこともこの方針にしたがうものである。唯一の木管として，Oboe di Barocco を高音旋律楽器として援用した。

7. Organo は Tutti のとき以外は，その木管性に注目して，どちらかというと Coro Ⅰ 側に傾けてある。

8. 特殊楽器の代替は，Oboe di Barocco を Oboe d'amore (または，通常の Oboe) に

替えるくらいでとどめてほしい。Organo を electronic な機構のもので代奏することをはじめとして，Flauto dolce→Flauto, Eufonium→Trombone とすることなど，あまり歓迎されない。もっとも最近は Tromba と Cornetto はその音色が非常に近づけられているものが多いから，この場合は，それを固執しようとするわけではない。しかし，Tromba で代表することがまったく困難なほどやわらかで美しい音色が Cornetto の本来の姿であるから，可能なかぎり，本来の音色をもつ Cornetto を使用することがのぞまれる。

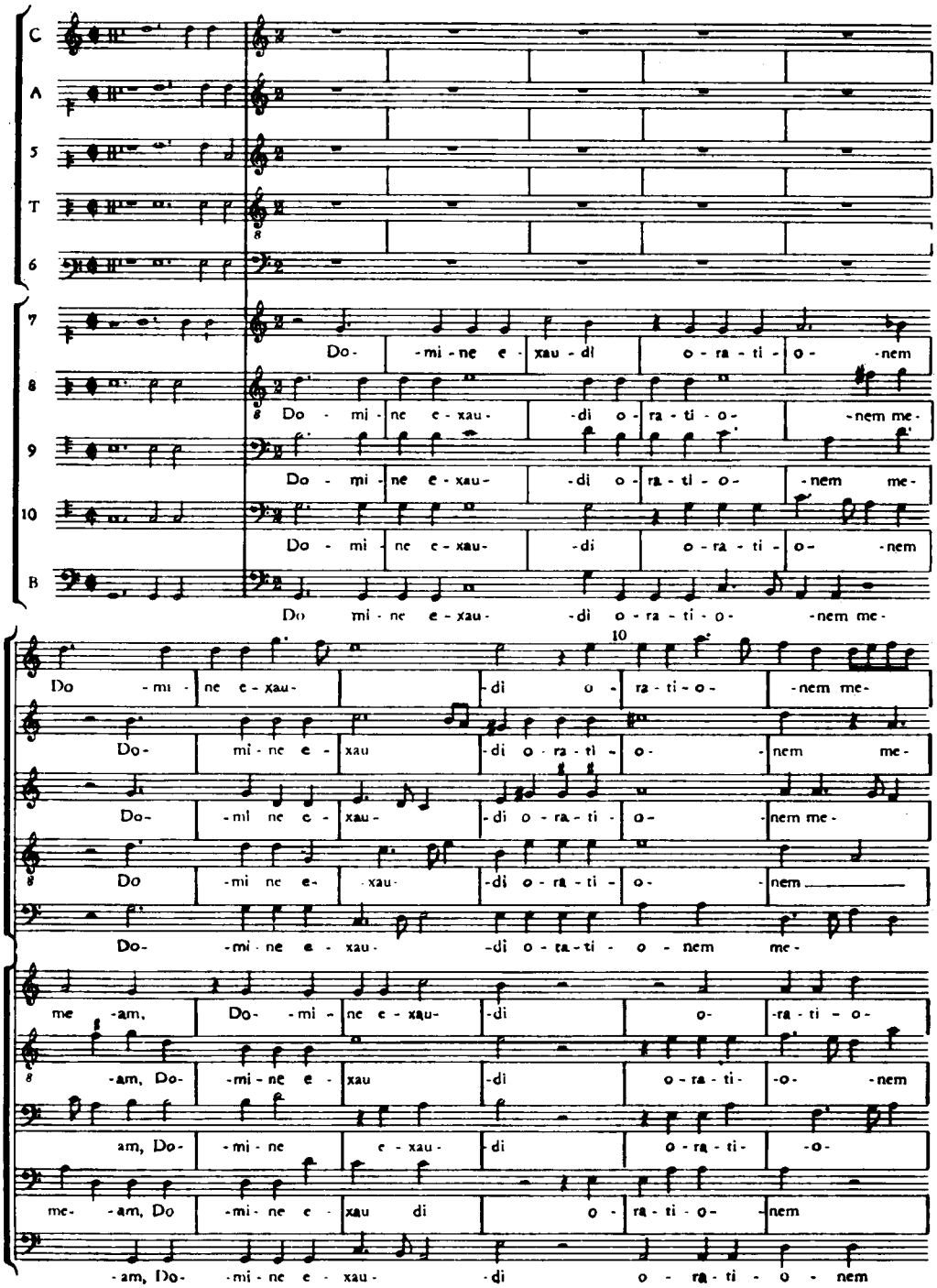
以上が編曲プランの既要である。

この曲は a capella の合唱曲として演奏することが十分可能であるし，また，合唱なしに Doppia Orchestra の楽曲として演奏されてさしつかえないよう考えられている。ただし，Coro と Orchestra の部分部分を組み合せることは絶対にさけてほしいことである。

なお，原合唱楽譜になにも書かれていないことでわかるように，Dynamik（強弱）指示ほかの記号・標語の指定はすべて編曲者の責任に帰するものである。これも含めての叱正の数々をいただければ幸いと考える。

最後になるが，演奏開始の導入はしばしば行なわれているように，Organo の Solo で呼びおこすことが最善の方法であろう。それには Organist の即興演奏が歓迎されることはもちろんであるが，その他の方法としては，Gabrieli の Organo 曲からとることがすすめられる。Dalla Libera 編の G.Gabrieli: Composizioni Per Organo（2 volumes, Ricordi）などには，Organo のための Intonazione や Toccata を数多く見出すことができる。編曲総譜の最初の余分の1小節は，このような場合を予想して，その最終の和音を書き入れたものである。

DOMINE EXAUDI



-am, et cla-mor me- -us ad te ve-ni at:

-am, et cla-mor me- -us ad te ve- -ni - at:

-am, et cla-mor me- -us ad te ve-ni-at:

me- -am, et cla-mor me-us ad te ve-ni-at:

-am, et cla-mor me- -us ad te ve-ni-at:

-nem me- -am, et cla-mor me-

me- -am, et cla-mor me-

-nem me- -am, et cla-mor me-

me- -am, et cla-mor me-

me- -am, et cla-mor me-

20

non a-ver-tas fa- -ci-em tu- -am a me;

non a-ver-tas fa- -ci-em tu- -am a me;

non a-ver-tas fa ci-em tu-am a me;

non a-ver- -tas fa- -ci-em tu -am a me;

non a-ver-tas fa- -ci-em tu- -am a me;

-us ad te ve ni at: non a-ver-tas fa- -ci-em tu- -am a me;

-us ad te ve -ni-at: non a-ver-tas fa- -ci-em tu- -am a me;

-us ad te ve ni-at: non a-ver-tas fa ci-em tu-am a me;

-us ad te ve-ni-at: non a-ver- -tas in

-us ad te ve-ni-at: non a-ver-tas fa-ci-em tu- -am a me;

Sacrae Symphoniae

《DOMINE EXAUDI ORATIONEM MEAM》

dal salmo n. 101, 1～3 〔Vulgata〕

Composto da GIOVANNI GABRIELI (1557～1612)

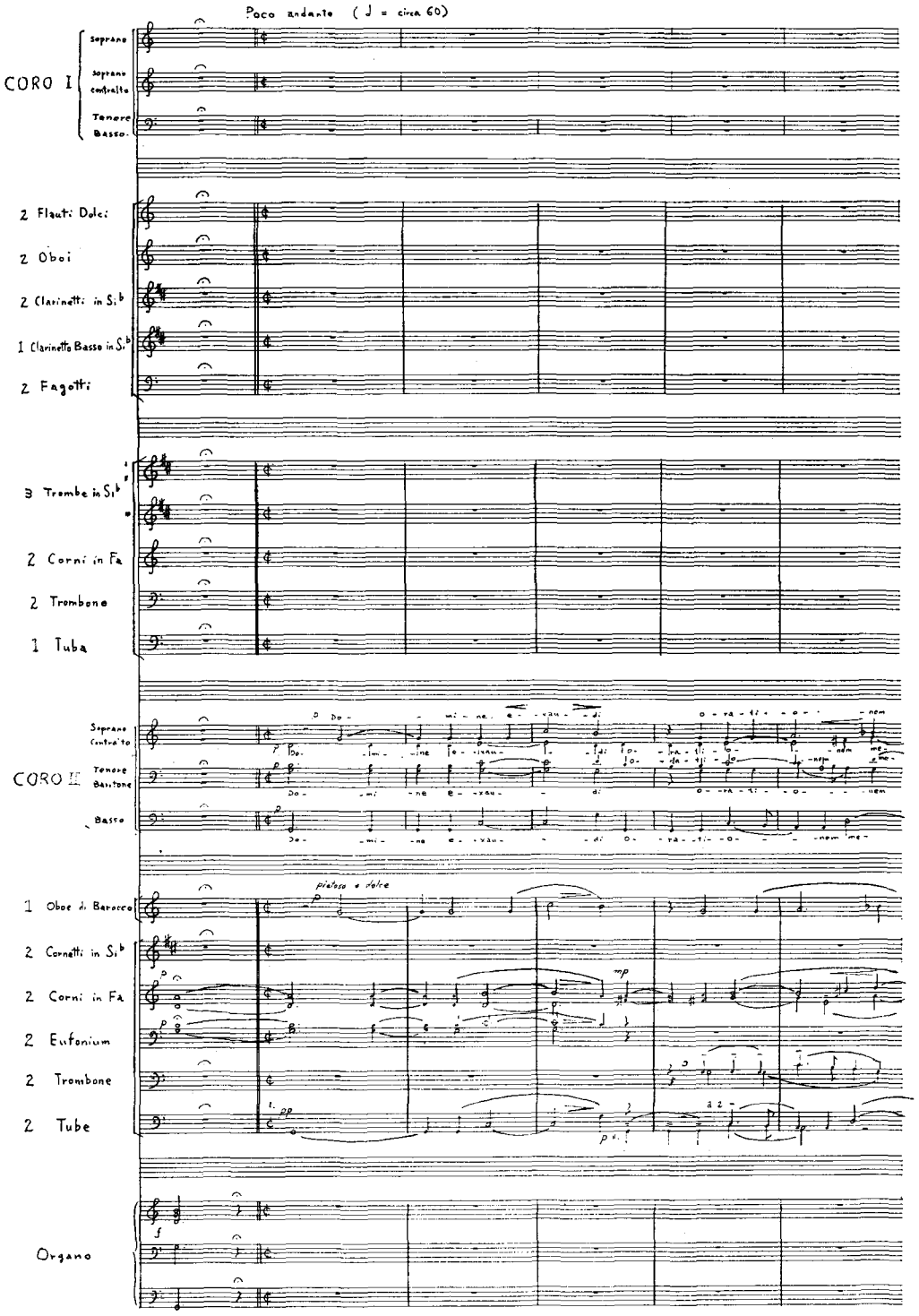
per Doppio Coro di Dieci Voci

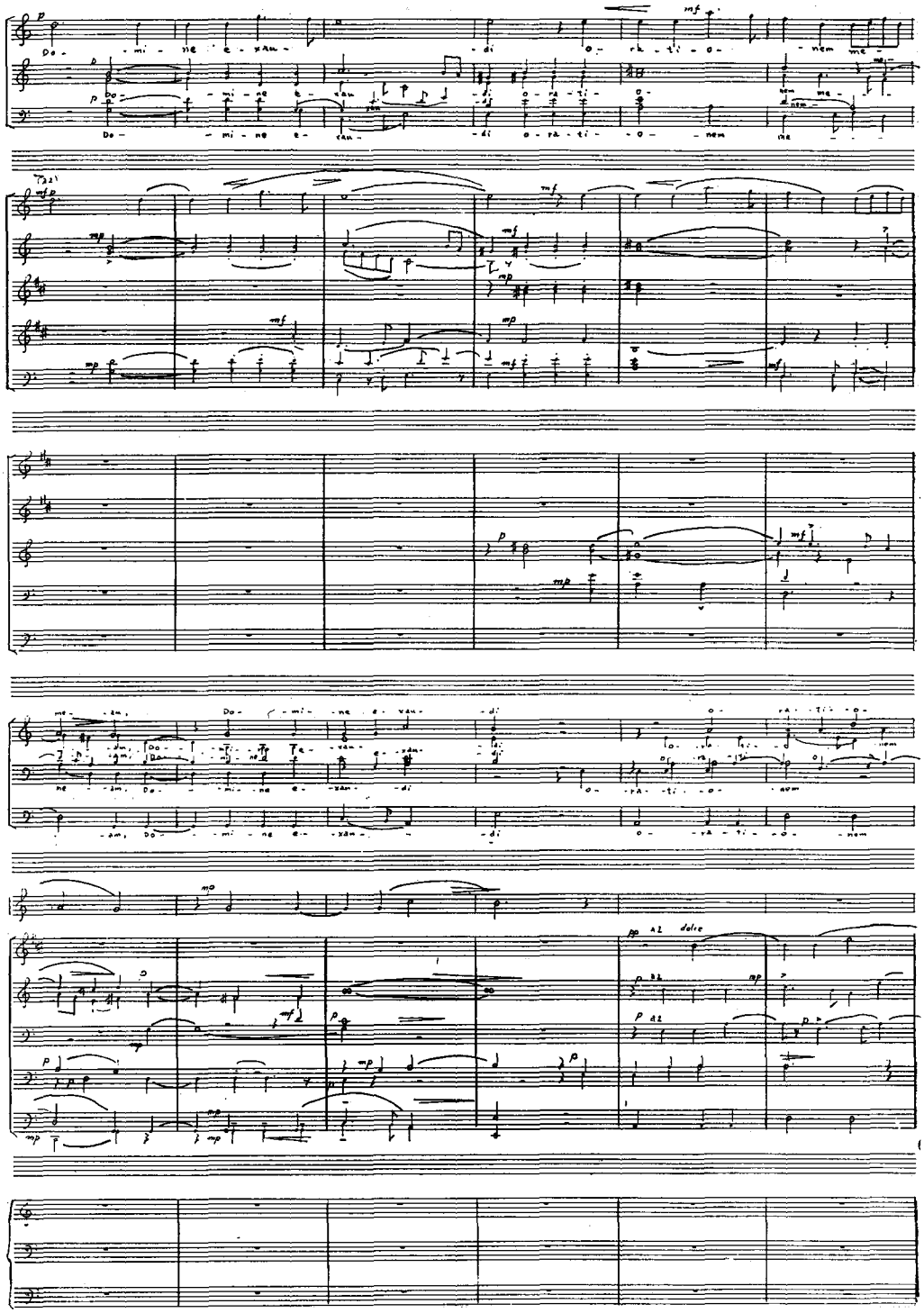
Riveduto ed Adattato da Eisei TSUJII

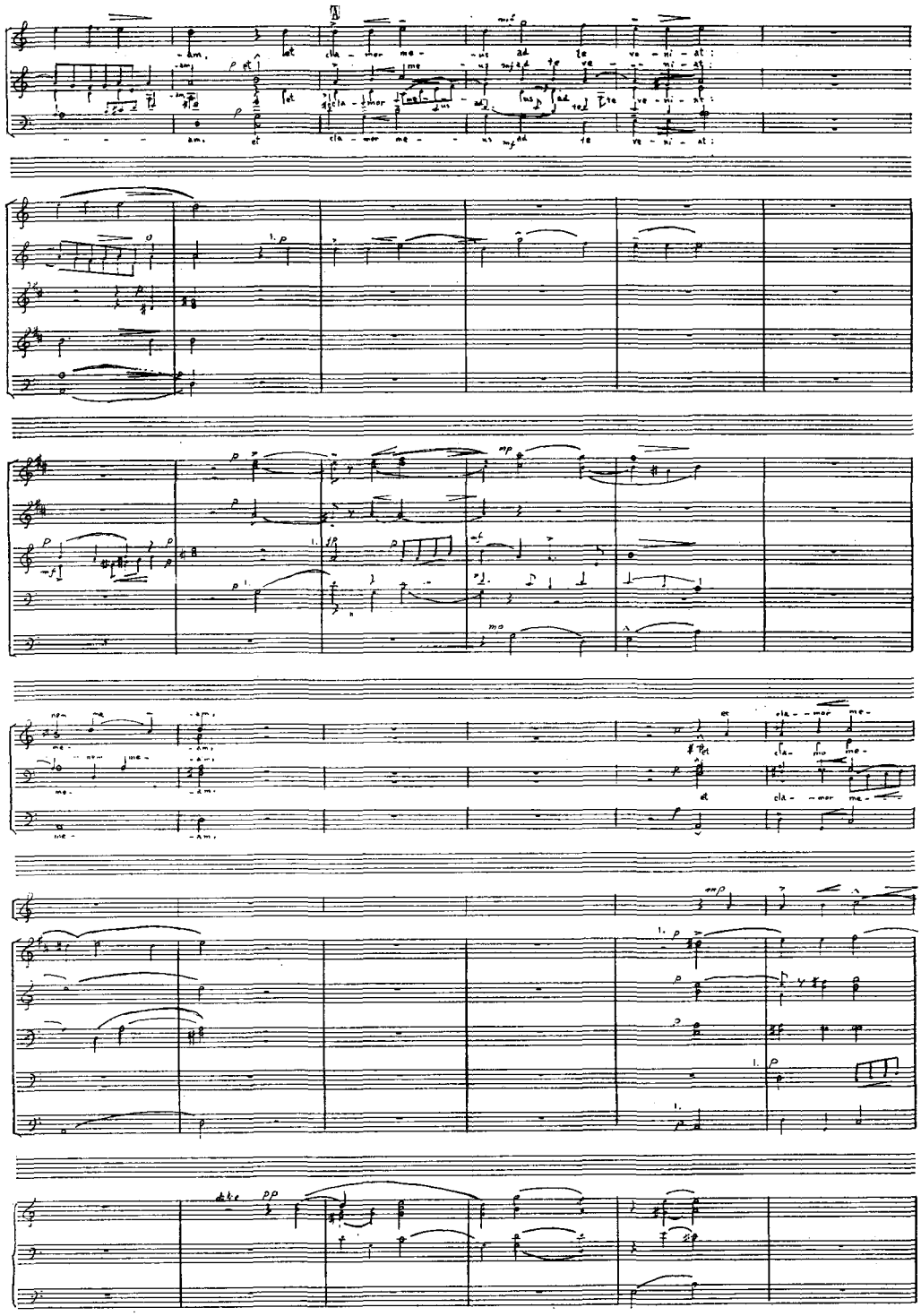
per Doppio Coro, Doppia Orchestra ed Organo

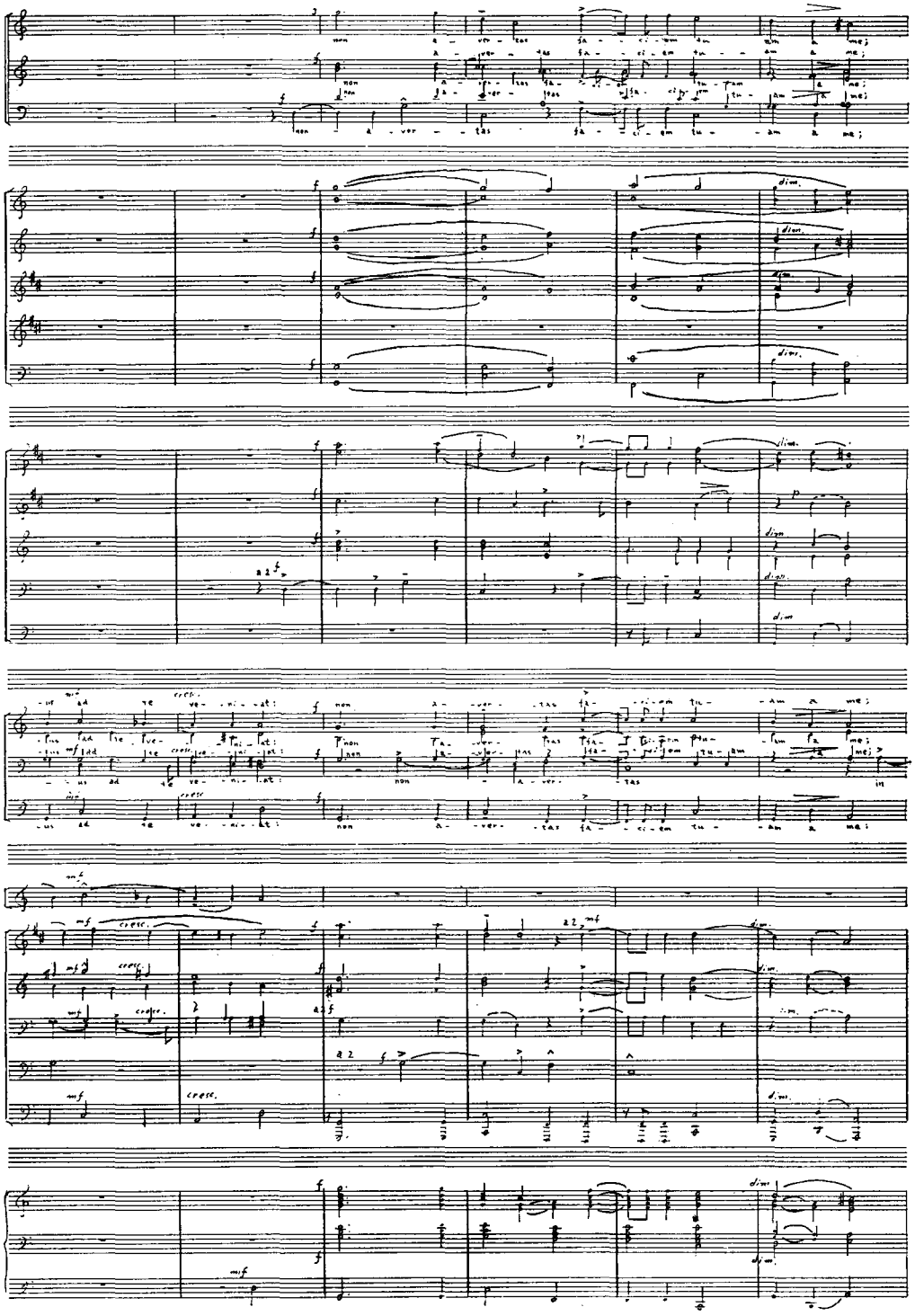
VOCI ed ISTRUMENTI

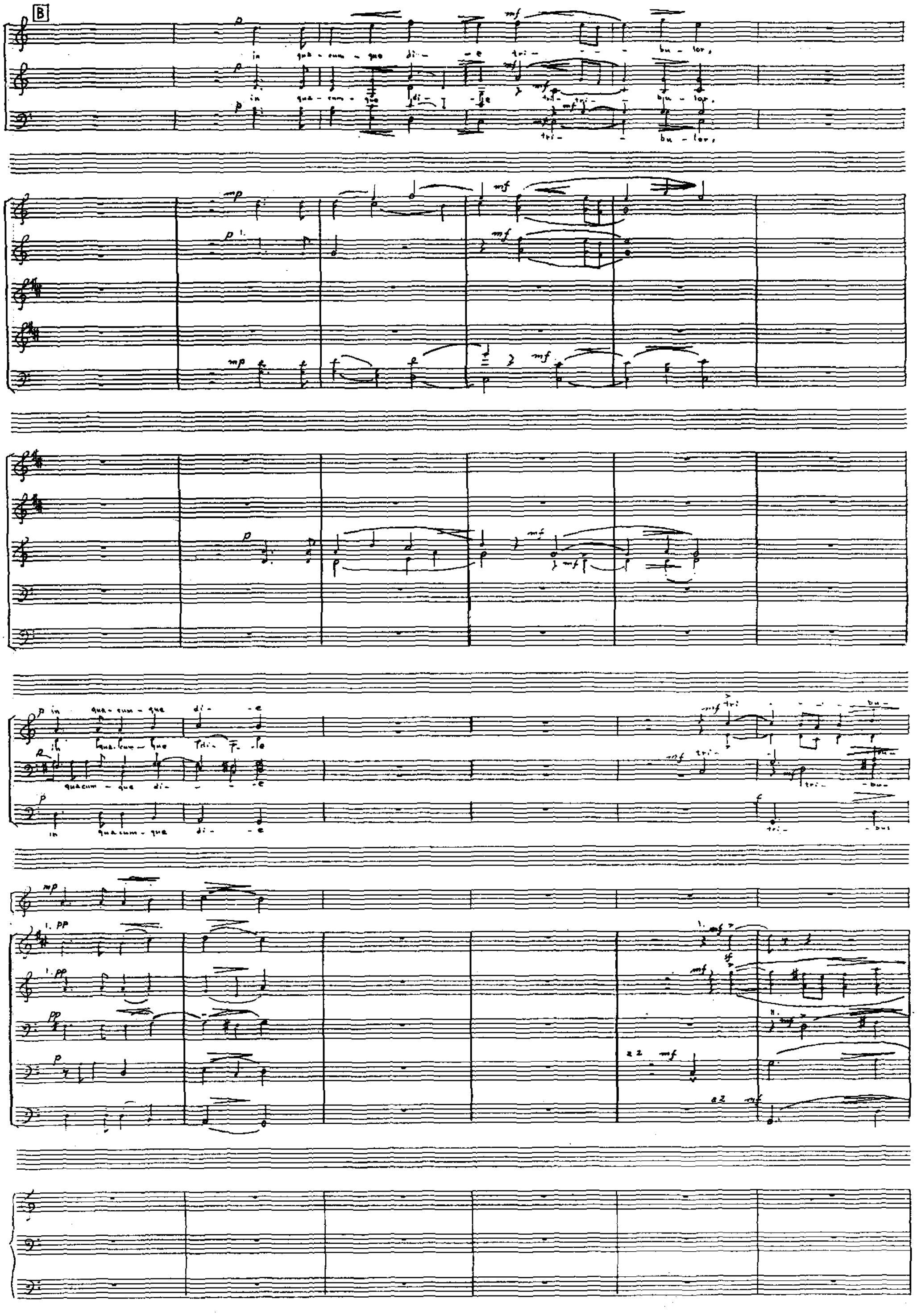
Coro I	Soprano Soprano Contralto Tenore Basso	Coro II	Soprano Contralto Tenore Baritone Basso
Orchestra I	2 Flauti Dolci 2 Oboi 2 Clarinetti in Si^b 1 Clarinetto Basso in Si^b 2 Fagotti	Orchestra II	1 oboe di Barocco
	3 Trombe in Si^b 2 Corni in Fa 2 Trombone 1 Tuba		2 Cornetti in Si^b 2 Corni in Fa 2 Eufonium 2 Trombone 2 Tube
	Organo		

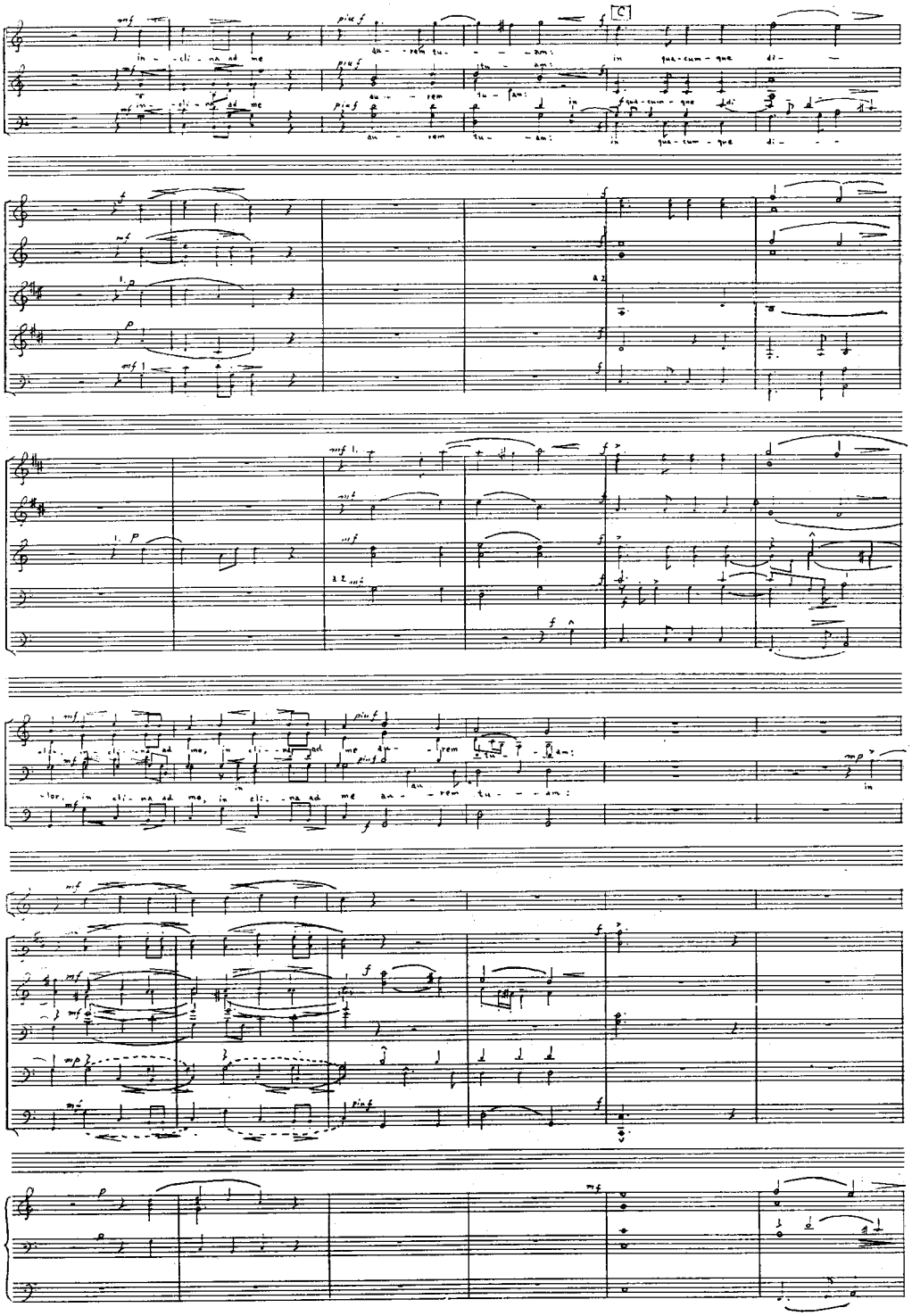

Poco andante (♩ = circa 60)
CORO I
Soprano
Soprano contralto
Tenore
Basso
2 Flauti Dolci
2 Oboi
2 Clarinetti in Si♭
1 Clarinetto Basso in Si♭
2 Fagotti
3 Trombe in Si♭
2 Corni in Fa
2 Trombone
1 Tuba
CORO II
Soprano
Contralto
Tenore
Baritono
Basso
Do- mi- ne e- xau- di o- ra- ti- o- nem me-
1 Oboe di Barocco
piatoso e dolce
2 Cornetti in Si♭
2 Corni in Fa
2 Euffonium
2 Trombone
2 Tube
a 2
Organo

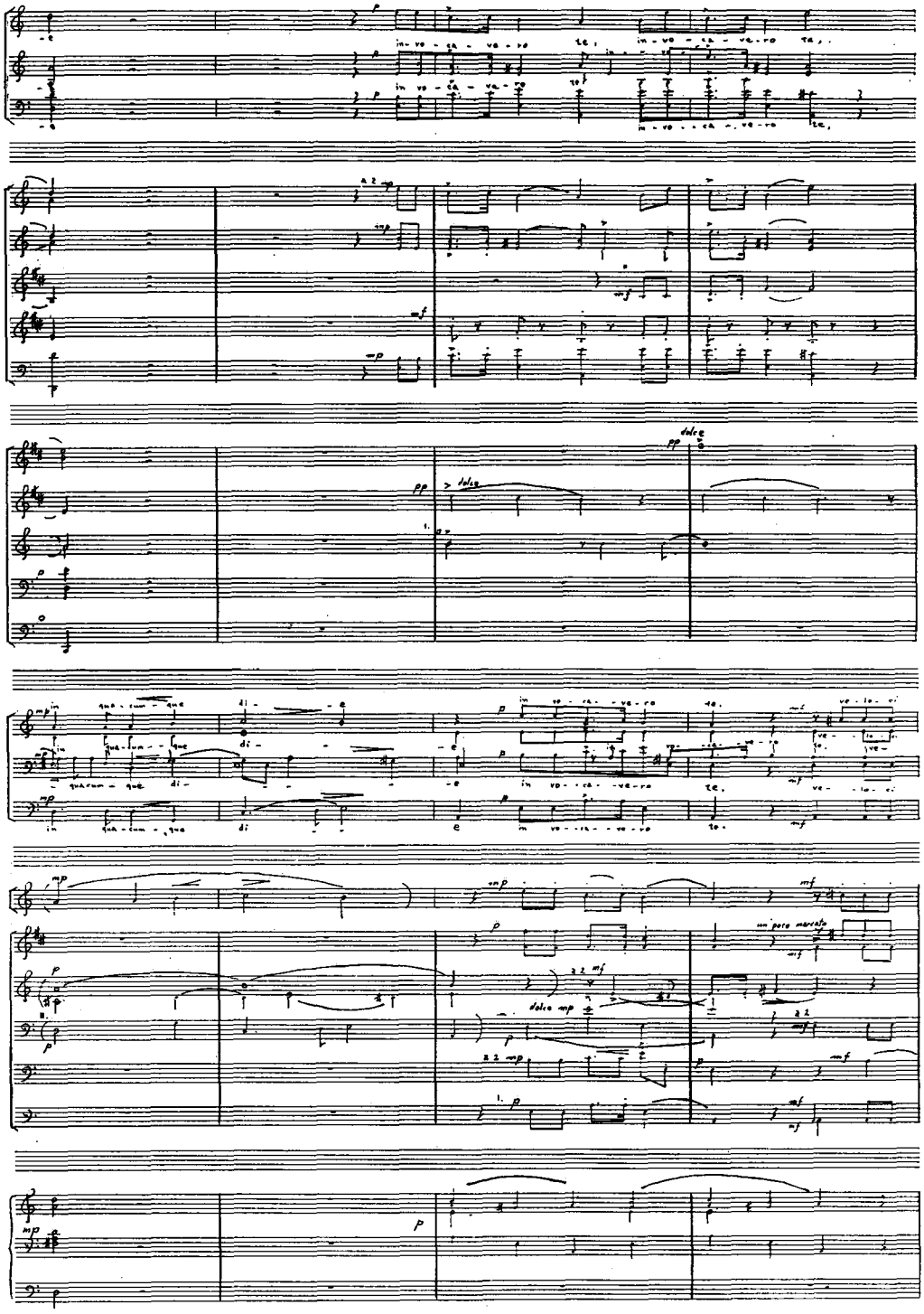

Do - mi - ne e - xau - di o - ra - ti - o - nem me -
Do - mi - ne e - xau - di o - ra - ti - o - nem me -
Do - mi - ne e - xau - di o - ra - ti - o - nem me
me - am, Do - mi - ne e - xau - di o - ra - ti - o - nem
ne - am, Do - mi - ne e - xau - di o - ra - ti - o - nem
- am, Do - mi - ne e - xau - di o - ra - ti - o - nem
dolce

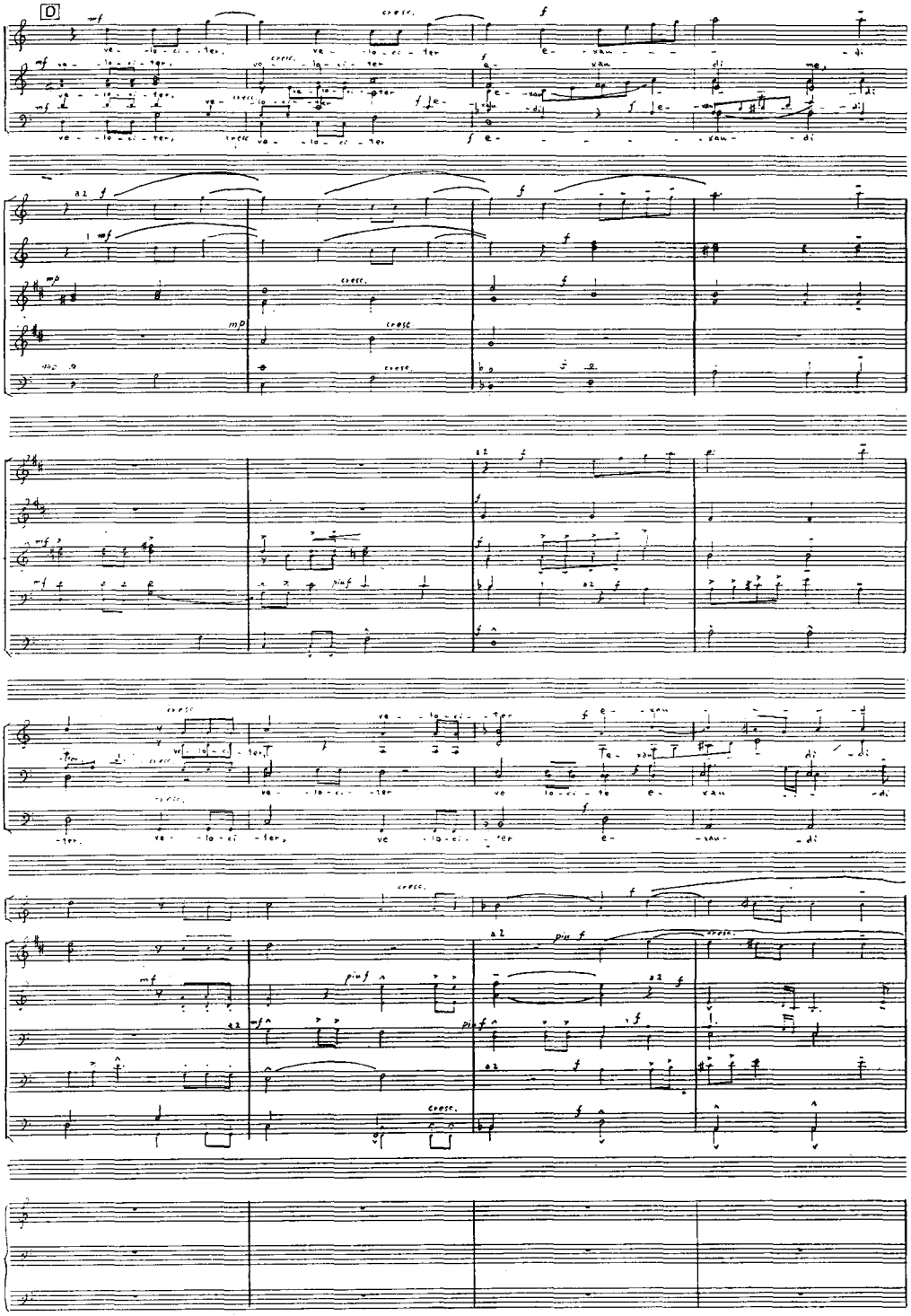

et cla - mor me - us ad te ve - ni - at :
et cla - mor me - us ad te ve - ni - at :
et cla - mor me - us ad te ve - ni - at :
cla - mor me -
et cla - mor me -
cla - mo me -
et cla - mor me -
dolce pp

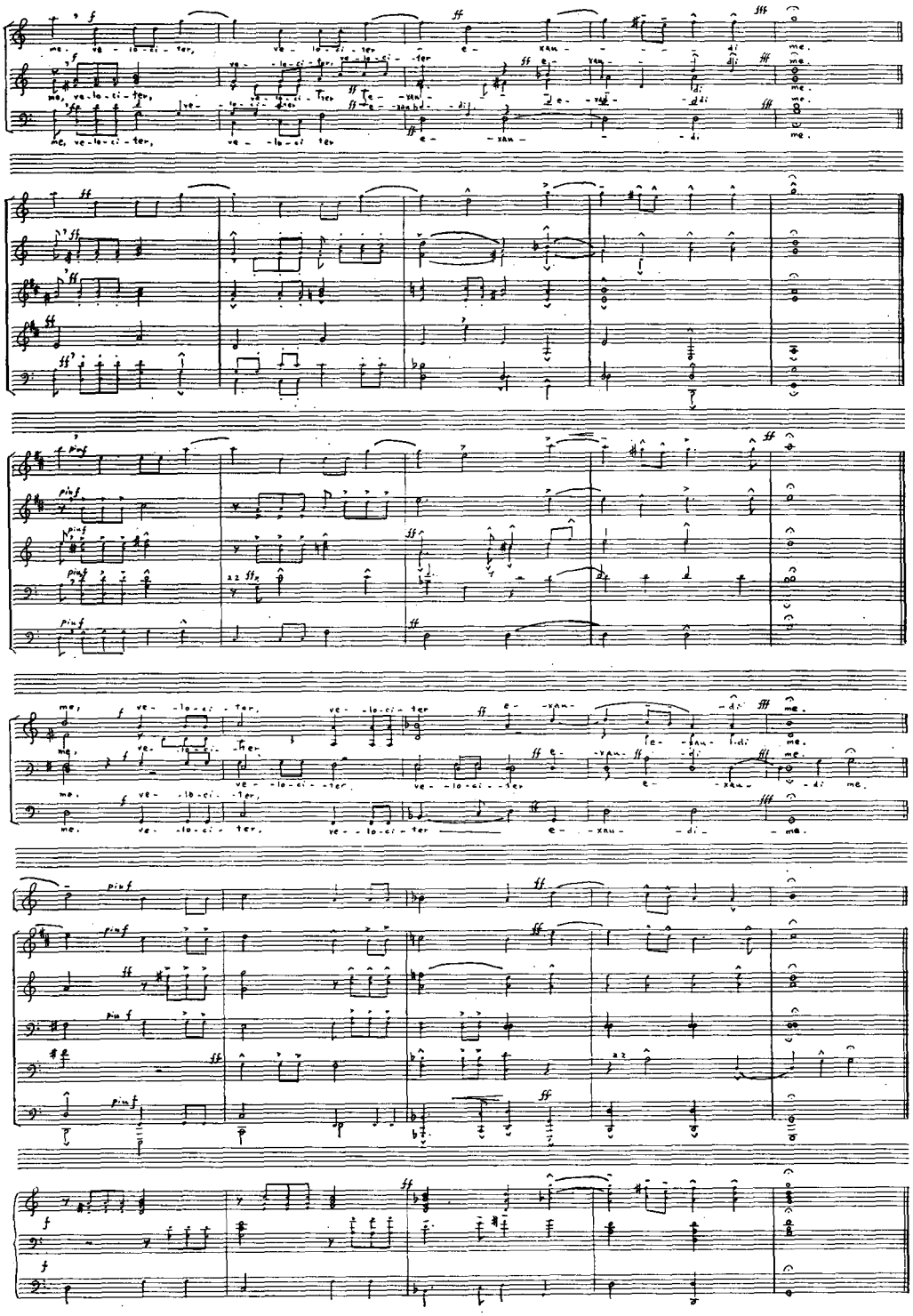

non a - ver - tas fa - ci - em tu - am a me;
dim.
a 2
cresc.
mf
in


B
in qua - cum - que di - e tri - bu - lor,
in qua - cum - que di - e tri - tri - bu - lor,
tri - bu - lor,
in qua - cum - que di - e
quacum - que di - e
in qua - cum - que di - e


[C]
in - cli - na ad me
au - rem tu - am:
in que - cum - que di -
a 2


in - vo - ca - ve - ro te,
in - vo - ca - ve - ro te,
in - vo - ca - ve - ro te,
in - vo - ca - ve - ro te,
a 2 mp
mf
mp
pp
dolce
pp
dolce
in que - cum - que di - e
in que - cum - que di - e
in vo - ca - ve - ro te.
in vo - ca - ve - ro te.
in vo - ca - ve - ro te.
mp
mf
mp
mf
un poco marcato
mf
a 2 mf
dolce mp
a 2
mf
a 2 mp
mf
mf
mf
mp


D
mf
cresc.
f
ve - lo - ci - ter,
ve - lo - ci - ter
e - xau - di
a2
mp
cresc
pim f
pim f
a2
cresc.


me, ve - lo - ci - ter, ve - lo - ci - ter e - xau - di me.
me, ve - lo - ci - ter, ve - lo - ci - ter e - xau - di me.
me, ve - lo - ci - ter, ve - lo - ci - ter e - xau - di me.
me, ve - lo - ci - ter, ve - lo - ci - ter e - xau - di me.
me, ve - lo - ci - ter, ve - lo - ci - ter e - xau - di me.
me, ve - lo - ci - ter, ve - lo - ci - ter e - xau - di me.